

2014年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（短期）

所属・職・氏名：商学部・教授・木山 実

研究課題：米国における日本史研究の動向に関する調査、および戦前期日本商社の活動

留学期間：2014年11月29日～2015年2月12日

留学先：国・都市：アメリカ合衆国・カリフォルニア州サンタバーバラ

研究機関：カリフォルニア大学サンタバーバラ校（UCLA）・歴史学部

研究成果概要

留学の研究成果は以下の4つに分けられる。

まず1点目は、私の専攻である日本経営史に関する新たな着想が得られたことである。前回の留学（2005年10月～2007年9月）に続いて今回もカリフォルニア大学サンタバーバラ校（UCLA）歴史学部のルーク・S・ロバーツ教授に受け入れ窓口になっていただいたが、今回の留学で私は同教授の研究室でかなり長時間にわたって対話を重ねることができた。ロバーツ教授は、近世土佐藩の武家組織について研究されてきたが、同教授によれば、土佐藩の武家組織は上から家老、中老、馬廻り、小姓、留守居役という階級構造になっており、必ずしも上位階級ではない小姓・留守居役の中から勘定頭（かんじょうのかみ）が任命されて藩財政を司り、また馬廻り・小姓級の者から御納戸役が選ばれ大名の家政・家計管理を司っていたという。明治維新以降、この御納戸役が家扶・家令となって土佐藩主・山内家の家政改革役に抜擢されていったとのことであるが、この点が私の研究領域「経営史」と重複するところである。各藩出身の家扶・家令は旧大名の家計・家政管理を司りつつも、旧大名の保有する資産を旧大名に懇請して商売の世界に投資させ、新たな会社を立ち上げて、廃藩置県後に職を失った各旧藩の士族にその新たに立ち上げた会社で新たな職に就かせようと奔走した例が散見される。私はこれこそが明治期に東京、あるいはそれに次いで大阪などの大都市で「財界」というものが形成されていく大きな契機の一つとみてきたが、その財界形成史の研究において、旧藩の時代にまでさかのぼっていけば何か従来とは異なる論点が導けるのではないかという着想・ヒントがロバーツ教授との対話のなかから得られた。このことが今回の留学の最大の成果だと考えている。

2点目は、歴史学部および東アジア研究学部で日本史や日本関連を研究する教員、大学院生たちと交流の機会を得られたことである。特にロバーツ教授のもとで日本近代史を専攻されているケート・マクドナルド准教授は戦前期の日本と満州の関係を研究テーマにされているが、日本人の満州旅行を斡旋する旅行会社やツーリズムなどにも注目され、私の経営史とも重なるところがあった。彼女との対話から私は多くの刺激を得たが、マクドナルド准教授はまだ若い研究者で、頻繁に日本に来られているとのことであるから、今後のアメリカ人研究者との交流を維持する上でも彼女との邂逅は重要であったと考えている。

3点目はアメリカにおける日本史研究の現状を垣間みることができたことである。ロバ

ーツ教授との対話のなかで、アメリカにおける日本史研究の現状をお聞きしたが、アメリカでは日本史研究者はたいてい Association for Asian Studies に入会するというのを教えていただいた。当該学会はアジア研究学会とでも訳すものであろうが、会員数は約 8000 名を数えるとのことである。アジア研究ということで、日本関係以外でも中国、韓国（朝鮮）、東南アジアまで含んでいて、対象とする国は幅広い。中でも中国研究者が一番多いとのことであり、日本関係がそれに次ぐ。日本関係は日本史だけではなく、現代の日本文学、現代日本事情などをも含んでいる。会員が一堂に会する学会が年 1 回開催される。この学会の運営に関して興味深く感じたのは、その年会費が各会員の年収に応じて変わることである。他にも日本史研究者が入る学会が 3 つほどあるようだが、いずれも一堂に会しての年次大会は無く、インターネットで情報交流しながら学会紀要を刊行しているとのことである。これはアメリカの国土の広さも影響しているように思われた。

アメリカの日本史研究者が研究対象とする時代は、近現代が圧倒的に多く 7 割方を占めるのではないかとのことである。その中でも特に現代史が非常に多いという。逆に江戸時代、中世、古代と時代をさかのぼればそれだけその時代の研究者は減ることである。現代史の研究者が最も多いのは、アメリカ人が日本史で最も関心を示すテーマが太平洋戦争とか戦後の GHQ 占領政策期とか、アメリカが戦勝国として日本と関係している時代であるからであろう。

以上のことはいずれも UCSB での滞在中に通じての得た成果・経験であるが、今回の留学期間中に私はアメリカ国内での出張を 2 回実施した。1 回目はマンザナーを経てロサンゼルスの日系人博物館をめぐる出張である。特に日系人博物館では、太平洋戦争直後の西海岸に移民として渡った日本人の資料などを探してみたが、特にめぼしいものに出会うことはできなかった。2 回目の出張は東部ワシントン DC 近郊（厳密にはメリーランド州）の国立公文書館（NARA）別館へのお出張である。太平洋戦争開戦後にアメリカに進出していった商社等の日本企業は社内文書を根こそぎ接収されたが、その膨大な接収文書を NARA で公開しているので、その史料閲覧および写真への撮影を実施した。今回は特定の企業に関する史料ではなく、戦前（1930 年頃）にニューヨークやシアトルに駐在していた商社を中心とする日系企業が組織していた日本人会など、ヨコの組織に関する史料を重点的に閲覧・収集した。今回の NARA での史料収集に際しては、事前に所蔵史料の確認や史料請求等のアテンドをしてくれる業者をお願いしておいた甲斐もあって、現地での史料収集はきわめてスムーズに進み、5 日間にわたって 1000 枚を超える写真を撮影することができた。この収集史料の分析は今後の課題とせざるをえないが、この 2 回目の出張できわめて興味深いいくつかの史料に出会うことができた。この出張による史料収集は、今回の留学での成果の 4 点目としてあげさせていただきたい。

私の今回の留学での研究課題は、「米国における日本史研究の動向に関する調査、および戦前期日本商社の活動」であったが、以上のような成果を得て、課題に沿ったまざる成果が得られたのではないかと考えている。

貴重な留学の機会を与えていただいた学院と大学に対し、感謝申し上げます。